

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370103271
法人名	社会福祉法人 淳風福祉会
事業所名	若宮園グループホーム
所在地	岡山市南区箕島3566-1
自己評価作成日	平成 24年 11月 11日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・ご家族や地域住民の協力をいただきながら、入居者の皆様が地域行事に参加したり、地域の方々(サロンや学童保育等)を当グループホームにお招きする機会を年々増やしてきている。その中で、入居者の皆様と、共同の作業を通じて交流を深め、開かれた事業所を目指している。また、地域の方々には認知症に対する正しい理解や、グループホームの目的・役割・現状等について、情報を発信している。

・法人の理念である「淳風誠心～人に優しく 心をこめて～」のもとに、入居者の皆様が、その人らしい日々の生活が過ごすことができるよう支援している。法人施設(特養・デイサービスなど)が同一敷地にあり、施設間の連携による健康管理・緊急時の対応・災害時の協力体制の確立など、安心・安全な設備環境を整え生活していただいている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	eokensaku_ip/33/index.php?action=kouhvoy_detail_2012_022_kani=true&JigvosvoCd=3370103271-00&PrefCd=33
----------	--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

住宅団地を通り抜け、森林公園の様な自然のあふれる場所に、同一法人が運営する事業所が集まっている。それぞれの事業所同士が互いに連携が取れており、職員の交流も盛んである。定期的に様子を見に来る医師・看護師・栄養士・言語聴覚士等の専門職員が多く、利用者の暮らしを支えており安心感がある。事業所は平屋建て、共用空間は机など配置され、少し狭く感じるが、『狭いながらも楽しい我が家』という家庭的な雰囲気があふれている。訪問当日、数名の利用者が包丁を使って食材を切ったり、炒めたりするなど、積極的に食事作りに参加しており、その姿を見ていると介護の必要があるという事実を忘れてしまいそうになった。家族には前もってカンファレンスの日時を知らせており、家族と一緒にじっくり話をする時間を作っている。壁画作りやちぎり絵、習字、生け花などレクリエーションにも力を入れており、今年も公民館で恒例の合同作品展を近隣のグループホームと一緒に開催している。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	有限会社アウルメディカルサービス
所在地	岡山市北区岩井二丁目2-18
訪問調査日	平成24年11月27日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている(参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の理念を基本に、地域密着型サービスの役割と意義を考え、事業所の理念を設定している。その理念を全職員が理解し、いつでも共有できるように、二つの理念を廊下等に掲示している。	玄関脇の廊下に掲示している。また、パソコントップ画面に常に表示されるのでパソコンを開くたびに目に入り、自然に意識づけができる。2つ目に挙げている『おいしい家庭的な食事を一緒に作り、食べて頂きます』は2年前に職員みんなで作成し、日常生活の中で実践されていることが感じられる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	利用者の定期的な地域行事への参加と、地域の方々を招いて共同作業で「鯉のぼり作り」を行った。また地域の公民館において、去年同様に近隣のグループホームと合同で、利用者の作品展示を行った。	地域の祭りやイベントへの参加、保育園の慰問等交流を重ねてきたが、今年は一歩進め、『鯉のぼり作り』に小学生や民生委員等を招き、白い布から一緒に色付けを行った。12月には第二弾のしめ縄作りを行う予定。地域のいろいろな世代の方との交流を深め、福祉を伝える役割を果たしている。	季節の壁面飾りはとても新鮮でほっとする雰囲気がある。近隣グループホームとの合同作品展も恒例になっている。これからもう一歩発展させて、3つのグループホームで作った作品を並べると一つの作品になる等、会場に行って利用者のみなさんがアツと驚くような企画をしてみてもはどうでしょうか。期待しています。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	恒例の地域行事「さくら祭り」に近隣グループホームと共同参加し、認知症の正しい理解とグループホームにおける生活やケアについて、資料配布による啓発と、各種の相談にも対応した。また、例年同様に積極的に実習生の受け入れを行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	3ヶ月毎に開催し、毎回地域包括支援センターの職員に参加していただいている。会議では、一方的な現状の報告だけでなく、委員(民生委員等)から、地域との関わりや行事への参加等について、意見・提言をいただいている。	3ヶ月に1回開催している。利用者家族・民生委員・岡山市介護相談員・地域包括支援センター職員等が参加している。事業報告や地域行事等の情報交換があり、行事の計画に発展することも多い。意見交換も活発に行われている。	参加メンバーが固定化しているようなので、新しいメンバーを加えてみてはいかがでしょうか。栄養士など専門職員の紹介も兼ねて、いろいろな職種の方が参加すれば、新しい切り口も出てくるのではないのでしょうか。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域包括支援センター・サブセンターが若宮園内に設置されており、事業所の運営状況や相談等について連携・協力体制がとりやすい環境にある。	介護保険課には何か分からないことがあれば連絡し、相談している。行政からも事業所での行事や地域との連携について尋ねられることもある。地域包括支援センターとは、よく連絡を取り合い、情報も提供してくれている。	これまでと同様に、行政に対し、事業所の報告を含め、グループホームの現場の様子などを伝え続けてくれることを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	若宮園各施設合同で設置する身体拘束廃止委員会に職員が属し、法人全体で拘束廃止に取り組んでいる。玄関の施錠は、昼間ではできるだけ開け、利用者の行動把握に努めているが、利用者に不穏な言動や危険性が予測される場合は施錠している。	身体拘束廃止委員会を設置し、年に数回、勉強会を行っている。身体拘束のマニュアルを作成しており、やむを得ず身体拘束が必要になった場合の書類は整備されている。しかし、今まで身体拘束の事例はなく、使ったことはない。利用者に不穏な行動が見られる時には、体調や精神面など何が原因かを職員で話し合い、対応している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	若宮園各施設合同で定期的に関催している施設内研修において、高齢者虐待防止関連法や虐待事例等について研修テーマを取り上げている。積極的に職員が、施設内研修に参加し、理解を深めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員が外部研修に参加し、権利擁護に関する制度についての理解を深めるとともに、有効な活用が図られるよう、知識の習得に努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約締結時に関連の資料をもとに、わかりやすく説明を行っている。料金など変更事項が生じた際は、必ず家族へ個別に説明・相談を行い、理解・納得をいただいたうえで、同意書の提出をお願いしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族には面会時やカンファレンス時に、なんでも要望や意見を言いやすい雰囲気作りを努めている。年に2回、花見や忘年会を兼ねた家族会を開催し、その席上で要望・意見があった事項については、職員のミーティングで話し合うなど、ケアの向上に取り組んでいる。	3ヶ月に1回、カンファレンスを開催している。家族にはカンファレンスの年間スケジュールを渡し、その日に出席して頂くよう呼びかけ、ほとんどの方が参加している。1日3家族ずつ、30分位の時間を取っている。管理者、看護師も同席し、日常の様子や病気などの質問もあり、家族の意向も聞くことができる。職員の対応等に関する家族アンケートも実施している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々のコミュニケーションを大切にし、職員の意見・提案を聞き、施設の運営をはじめ、よりよいケアや行事に反映させるようにしている。	職員それぞれの料理や手芸などの得意分野を活かし、お互いに協力関係ができています。年に2回、個人面談を実施しており、職員の意見や希望を聞くと同時に、事業所から職員に対して望むことも伝えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	介護支援専門員などの資格取得に向けた支援体制を整えている。(現在、介護福祉士は職員全員が取得)現場での職員の業務分担については、得意分野を考慮して、管理者が決定している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	若宮園各施設合同の施設内研修・実習指導委員会に職員が属し、施設内研修会(月に2~3回)に交代で参加している。外部研修については認知症に関する研修や、介護支援専門員の更新研修等にも参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣のグループホーム(3施設)の管理者と定期的な会議を設け、情報交換や合同で地域行事の参加を行う。また3施設合同で研修会のほか、年に1回交換実習を行うなど、職員間の交流を深めている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面談で必ず本人とお会いし、これまでの生活歴や現在の生活状況をよく聞き、その実態を把握すると共に、日常生活に関しての要望等の周知に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前面談の際や入居前に、現状を踏まえたうえで、介護保険制度におけるサービス提供の内容や方法について、家族に説明している。また、家族の要望等を踏まえ、事業所として具体的な対応やサービスの提供について事前に伝えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	面会や相談時に本人や家族の思いや要望などを改めて確認し、心身の改善に向けた適切な介護方法の提案や生活面等の相談に対応している。必要があれば、法人内のサービスだけでなく、他事業所のサービスの利用について検討するなどし、支援に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者は人生の先輩ということ、職員間で再確認している。料理や地域行事、土地の歴史など、利用者から教えていただくことが多く、日々の生活のなかで相互関係・相互理解ができるように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者の日々の生活状況について、面会時やカンファレンス時に細かく報告するとともに、家族からの相談にも応じている。また、家族の協力を得ながら、利用者が一層充実した日々が送れるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	近所の友人・知人の訪問があり、また、隣接のデイサービスや施設利用者に友人や知人がいれば、互いに面談できるように支援している。	家族だけでなく、親戚や近所の友人、昔結婚のお世話をした方など色々な方が来所してくれる。利用者から柏もちの美味しいお店があると言われ、ドライブがてら一緒に買いにいったこともある。また、家族と一緒に外出や外泊をするときには、車椅子を貸し出したり、車の乗り降りを手伝うなど支援している。併設施設で2ヶ月に1回、居酒屋を開き、利用者が友人と会って話しが弾むこともある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共通の趣味や、住所が近いなど気の合う仲間同士がふれあい、交流を深め、一緒に楽しく時間を過ごせるよう、さりげなく職員がその場づくりを支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	グループホームから他の事業所に移られた後も、できる限りその事業所を訪問し、本人と面会して、その後の健康状態や生活状況の確認に努めている。また、家族からの相談に対応するなど、継続した関係が保たれるよう心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常の会話だけでなく、表情や行動から希望・意向を推測するなど、その把握に努めている。また、ケアプランの作成(3ヶ月ごと)にあたり、本人の希望・意向などを反映させるため、必ず本人に聞いて確認している。	日頃から利用者がよく口にするフレーズや声をかけた時の表情や態度を記録し、表現できない思いや意向の把握に努めている。その際、職員一人で判断することなく、管理者や担当者を交えて話し合い、情報を共有している。家族に利用者の気持ちや日常の様子を伝え、家族の意向を聞くように努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族から直接話を聞くことはもとより、了承を得て親族や、これまで利用のサービス事業所から、その当時の状況等について情報をいただき、より適切なサービスの提供に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	時系列で状況の把握ができる様式の個人記録とし、継続的に生活の様子が把握できるように工夫している。日常の生活のなかで、できる事に注目し、利用者ごとに全体像が容易に把握できるように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	管理者と担当の職員だけでなく、他の職員(併設施設の看護師を含む)からも意見を求め、利用者の目線で介護計画を作成するようにしている。また、毎月管理者を交えてモニタリングを実施し、継続か見直しかを検討している。	利用者のあったプランにするため、職員の意見だけでなく、看護師、栄養士など専門職員からも意見を聞き、ケアプランに反映している。また、ケアプラン作成時のカンファレンスには出来るだけ家族の参加をお願いしている。本人の食事量が減っているという課題があり、家族から昔好きだったものを教えてもらったり、それから面会時に食べやすいものを差し入れてくれるなど、家族も一緒に課題に向き合い、支援に参加してくれている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の健康チェックや活動、利用者の状態の変化等を個人の日誌に記録している。その他必要に応じて、申し送り簿等を活用し、職員間で情報の共有ができるようにし、個別ケアに反映させている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	予定日以外の外出等にできる限り対応しており、また、利用者、家族等の事情等から、通院の付き添いの必要が生じた場合など、個々の要望に可能な範囲で対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域から孤立しないよう運営推進会議の開催時や、民生委員、近隣施設の管理者等から、周辺地域の行事や支援に関する情報交換を行うなど、日頃から協力関係を築いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	若宮園各施設全体の協力医療機関のほか、利用者・家族が希望される医院(かかりつけ医)へ受診する場合、関連書類や必要なら付き添い、普段の様子や変化等、伝達支援を行っている。また、緊急時などについては、協力医療機関の受診を行い、併設施設の職員が送迎を行っている。	かかりつけ医に関して、入居時に本人、家族の選択に任せている。かかりつけ医に通院する場合の送迎は家族にお願いしているが、必要に応じて利用者の様子を書いた手紙を預けたり、職員が同行することもある。歯科の往診も随時、行っている。緊急時は協力医療機関に連絡し、受診支援を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設の特別養護老人ホームの看護師と24時間体制で連携をとっている。また、利用者の日々の心身状態については、申し送りや電話等で報告・相談を随時行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院後の面会をはじめ、ソーシャルワーカーを通じて、担当医や看護師、理学療法士等の医療関係職員と連絡を密にし、グループホームに復帰できるよう、働きかけや支援を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に事業所に対応できる範囲について説明を行い、利用者が重度化した場合や終末期の支援が必要となった場合は、家族と主治医等で話し合い、併設の特養や老健をはじめ、他の入所施設等を紹介し、円滑に入所ができるよう支援している。終末期ケアについて、若宮園施設全体の施設内研修に参加し、学習している。	重度化した場合や終末期の支援が必要になった場合、法人全体で助け合うシステムが出来ており、グループホームでの看取り支援は行っていない。入居時に併設施設を紹介し、家族が申し込むことが多い。緊急時には併設施設より医師や看護師が駆けつけ、適切な対応を行っている。終末期ケアについて研修は行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	若宮園各施設各所で開催している施設内研修において、緊急時の対応に関する研修を行い参加している。想定できる急変時の適切な対応方法や初期対応等について、マニュアルを整備しているが、事例が少ないことなどから、実際の対応に活かされていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	若宮園施設全体で、年2回避難訓練が実施され、グループホームも参加している。災害発生時においては、若宮園各施設と地域住民(隣接町内会)の協力を得て、避難体制の整備やマニュアルの周知徹底を図っている。今年度において、グループホーム単独での防火訓練を行った。	今年は全施設参加の避難訓練だけでなく、グループホーム単独での避難訓練を実施した。洗濯乾燥機が火元という設定で、事業所前の広場へ利用者を避難誘導した。また、若宮園は地域の避難場所として設定されており、3日分の備蓄食料等も用意されており、地域との協力関係を築いている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の性格や尊厳を考慮して、さりげなく自己決定できるような言葉かけや、見守りを心がけている。必要に応じ、個人の部屋でゆったり話を聞くなど、個別の対応に努めている。	接遇委員会が挨拶や電話対応等について分かりやすい月間目標を作成し、一つずつ積み重ねてスキルアップしている。勉強会で利用者がトイレに入っている時、入浴している時など色々な場面における言葉かけのタイミングをロールプレイングで学び、支援に活かしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の言葉だけにとらわれず、表情や行動、口調から当人の思い・訴えなどを読み取るように努めている。できるだけ、利用者自身で物事を決定できるように働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	長事やおやつ等、おおまかな時間の設定はしているが、一人ひとりの体調や気分に合わせて過ごすことができるように支援している。単調な生活にならないように、余暇時間はレクリエーションや体操、工作等を提案し、強制とならないように、希望者にしてもらっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	移動理・美容車が、月に1度若宮園の訪問があり、利用者の希望に沿った、カット・パーマ・毛染め等をしてもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者と職員が協働で、下ごしらえなど調理をしている。主に盛り付け、味見は利用者にお任せしている。食事メニューは、和食にこだわらず、洋食など色々な食事を楽しんでいただけるようにしている。	利用者と一緒に美味しい食事を作るという理念を実践している。食材を切ったり、炒めたり、味見をしたり、自然に行っている。嚥下困難な方や栄養管理について、栄養士や言語聴覚士などに相談し、お茶ゼリーなど食事に取り入れている。お箸や湯飲みを自宅から持ってきたものを使っている為、皆さん自分のものをよく覚えている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食が細い利用者には、当人の嗜好に合わせて、食べやすく、高カロリーなゼリーなどを提供している。また、体調の変化がみられる利用者には、食事・水分量のチェックを実施し、水分は小分けにして提供し、必要量確保できるよう努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ほぼ全員毎食後、個室の洗面所で口腔ケアをするよう促している。夕食後は、口腔ケアの後に、洗剤剤を使用して、義歯の清潔を保っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中はトイレでの排泄を促し、個別の排泄パターンを把握し、時間で誘導している。オシメを使用者であっても、できるだけオシメをしなくてよくなるように支援をしている。排泄のサインがある時は見逃さず、スムーズに誘導できるよう心がけている。	出来るだけオシメをしないことを目標にし、オシメを外せるよう支援し、成功した事例もある。個々の排泄や失禁した時間を記録を取り、パターンの把握に合わせて声かけし、トイレ誘導をしている。便秘対策として、朝食に乳製品を提供したり、散歩などの運動をしたりしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	利用者個々の排便チェックを記録し、毎朝牛乳などの乳製品を摂取してもらっている。午前と午後に体操をする時間を設けたり、便秘傾向な方には散歩を促したりし、身体を動かすように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	利用者には、週3回の入浴を基本として提供している。曜日や時間にとらわれず、本人の意思を尊重した入浴を心掛けている。入浴剤を使用し、リラックスして入浴できるよう支援している。	1日おきに入浴できるよう支援している。毎日入浴したいという希望があれば、対応していく予定。入浴を嫌がるときは、無理強いせず、時間や日にちを変更し、気持ちよく入浴してもらえるよう支援している。入浴剤も使用し、リラックスできるよう努めている。今はローヤルゼリーの湯を使用している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者が夜によく寝られるように、日中の生活リズムを整えるように心がけている。日中においても、ベッドで横になる時間を設け、メリハリのある生活に努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬時は職員が利用者一人ひとりに手渡し、又は直接口に入れ、飲み込むまで確認している。薬に変更ある場合は、服薬後の状態変化等に注意し、変化ある時は連携先である看護師に報告・相談を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者それぞれの得意分野や生活習慣をもとに、ガーデニングや梅ジュース、らっきょう漬、干し柿などを利用者主導のもとで行えるよう配慮している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	利用者が時節に応じて、外食やドライブに行けるよう行事計画を立て、実施している。月に1~2回程度、近所のスーパーへ買い物に行き利用者の嗜好品や必要な物を買に出ている。また、車椅子でも積極的に外出し、地域の祭りなどに参加している。	四季を楽しめるように、年度初めに花見や紅葉狩りなど計画を立て、実施している。また、個々の希望により、箸・コップ等の日用品や手芸で使う毛糸などをスーパーへ買いに行っている。事業所自体が山の上にあるため、近くを散歩するだけでも落ち葉や新芽などの変化があり、気分転換ができる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭については、基本的には事務所にて管理し、利用者同士のトラブルを考慮し、大金は個人では管理しないようにしている。小額に関しては本人の管理に任せている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者から電話使用の要望がある場合は、その都度電話使用できるように支援している。利用者が一人で電話ができない場合や難聴の利用者には、職員が仲介して、話ができるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合った壁紙や、利用者が作成した塗り絵などの作品を、廊下だけでなく、個人の部屋にも見えやすい位置に掲示している。また、空調に関しては利用者本位で調節し、体調管理に努めている。さらに、共用の空間はガーデニングで咲いた花や、季節の花を飾るようにしている。	明るすぎない照明で落ち着ける。リビングには、ゆっくり座れるソファが、あちこちに置かれている。利用者が生けた花が飾られ、水槽には熱帯魚も泳いでいる。季節を感じられるよう利用者が作った壁画や作品を掲示している。本日のメニューは利用者が色を塗ったイラストを毎日貼っており、とても分かりやすく工夫されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	施設内ホールと廊下にソファーにを設置し、ゆったりと、自由に座って過ごせる空間となっている。こうした設備を利用して、気の合う者同士で話しがしやすいように支援している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者が日々使用するタンスや寝具類等は、できるだけ、これまで使用していた物を持参してもらっている。また、自身が作った思い出の作品を展示して、個人がくつろいで過ごせる環境作りに努めている。	家で使用していた寝具や使い勝手がよいと利用者が持ってきた籐製のハンガーラックなどが置かれたりと、個々の好みが見られた居室になっている。写真が好きな人もいれば、あると落ち着かない人もおり、本人が落ち着いて過ごせる部屋作りを行っている。また、本人の身体状況に応じて、布団からベッドに変更するなど安全面も考慮し、対応している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者個々の身体状況に合わせて、施設内の必要な箇所に移動バーやコールマットなどの福祉用具を設置するなど、利用者の自立と安全な設備環境作りに努めている。		